

## たかが川柳 されど川柳 (十九)

上野 一彦

### 老いの執念

私は、既に鬼籍に入った樹木希林、田村正和、古谷一行たちと同じ昭和十八年生まれです。だから何だといわれてもこれがいつもの話の枕詞だからしょうがない。最近、和田秀樹氏の「八〇歳の壁」(幻冬舎新書)という本がベストセラーとして書店に積んである。広告には『人生一〇〇年時代だが、健康寿命の平均は男性七二歳、女性七五歳。八〇歳を目前に寝たきりや要介護になる人は多い。「八〇歳の壁」は高く厚いが、壁を超える最強の方法がある。』とある。奇しくも私、今年 of 末に迎える誕生日に八〇歳を迎える。だが、「正解」は自分で見つけたい。

の前に新しい景色が見えてきた、そんな気分なのだ。「あ・さ・ひ・で」この四文字が、私をあと一〇年生き延びたというきつかけを与えてくれた。

「旭出(あさひで)学園って？」 私は、二年前の十二月のこと、東京都練馬区にある私立の特別支援学校、学校法人「旭出学園」の無給の理事長という仕事を引き受ける羽目になった。誰だったか忘れたが、「あなたのわずかな資産をなくさぬように！」とのエール付きでもあった。

「旭出学園」は七〇年を超える歴史(創立一九五〇年)をもっている。戦後の特別支援教育の先駆的リーダーであったが、大学の恩師三木安正先生が創設した、知的発達に遅れをもつ子供たちの学校としてスタートした。旭出学園は「卒業のない学園」という初期の理念から、二つの社会福祉法人、富士旭出学園と大泉旭出学園を産んでいった。この三つの法人は旭出グループとして、三木先生の理想とした教育と福祉の融合のなかに、こうした人々の生涯教育・生涯福祉の実現を目指している。

しかし、その三木先生ご自身、一九八四年五月(享年七十二歳)で世を去っており、約四〇年、船長を失った旭出丸もすっかり老朽化してしまった気がする。今、先生の齢をすでに超えた私に、その船長の代わりが果たせるなどという大それた考えはもちろんなないが、旭出グループとしてそ

この歳になるとさまざまな縁の中に自分が絡めとられていくことに気づくことが多い。先日、家内に「八〇歳まで品質保証してきたが、あと一〇年生きることにしたのでよろしく」と宣言した。「がんばってください」と私の必死の宣言に、「またか」とあっさりといなされてしまった。

ただ寿命を先延ばししたわけではない。私はさまざまな縁の中で、あと一〇年どうしてもやり遂げなければならぬことがたまたま見つかったからなのだ。と言っても、それほど目を吊り上げて気負っているわけでも、一億円の、いや一〇〇万円の宝くじに当たったといったほどの特別なことでもなく、たまたま歩いているとき躓いて転んだら、目

の輝く理想のモデルを「残された夢」として、熱い心を持ち続けているスタッフの皆さんと共に少しでも一緒に歩んでみたいと思う、そのための一〇年である。

この二年間、学校法人旭出学園のスタッフや子供たちと触れ合う機会を通し、また隣接する社会福祉法人大泉旭出学園との月例の連絡会や、三法人合同の旭出グループの新人研修会や中堅職員研修会に出席し、私なりに大草原に漂う旭出丸の現状を私なりの感覚で見つめてきた。

これまで欧米の教育の姿を何度も見に行く機会があった。同好の士を募って何年おきかで先進諸国の障害児教育の事例を見る機会を積み重ねてきた。私自身、初めのころはよくある西高東低の「日本は遅れているな」風のビジター丸出しだったが、それぞれの風土、文化のなかで、その国民性が根強く反映していることを思い知ることとなった。明治・大正のようにただ西欧にあこがれるのでもなければ、昭和初期の西欧何するものぞと、知的鎖国状態に陥るのでもなく、自分自身の性を根底に、少しずつ進化させることなのかもしれない。

『障害の軽い重いは、その環境によって変化する』蓋し名言、この言葉は限りなく真実である。私がたどり着いたのは、まさにこの言葉であった。

訪問先のプレゼンテーションに長けた学校や施設では、

お客様向けのショウウインドウをさつと見せて、素晴らしいといわせる技を持っているところもないわけではなかった。元来へそ曲がりの私は、相手が見せたいものをそのまま見て感動するほど素直ではなかったのかもしれない。同業者であれば、共感できる理想や信念がその原点にあったとしても、現実との対峙の中で、変節とは言わないまでも妥協を余儀なくさせられることもある。むしろそうした課題や問題を互いに見つめあい、互いに思いを交わすことが理解し合うということだ。

経済的なこと、行政との関係、医療的なこと、住民の理解など、少しでもその本質に迫る共通の課題を質問すると、質問する側にとって本当に役立つ情報が得られる。一九九二年から九三年に文科省の在外研究員という資格で、丸一年、米国に滞在する機会があった。下手な英語ではあったが、インターネットがまだ普及する前でありFAXと車で、六〇カ所以上、様々な学校、施設を一人で訪れた。

私が学んだことは、英語の流暢さよりも、本質を洞察する力と知りたいという熱意に対して相手はリスペクトしてくれるということだった。その時の思いが、熟成され今日に至っている。コロナ禍ではあったが、二年間、「旭出学園」とかかわる中で、旭出グループとしての課題もたくさんあるが、学校法人については残された夢を紡ぎ続けるだ

題詠「巻く」

選ぶなら巻道それと女坂

うんうんと生返事して煙に巻く

題詠「くつきり」

冬空に凜と聳える俺の富士

川向こう次の扉が見えてきた

題詠「期待」

DNAわが子に託す俺の夢

親だもの馬鹿にもなれば溺れもす

ぱらばらⅡ 一八号

悪い人そういわれれば本望よ

枝離れ名残惜しげに逆らわず

爪先に老いの影みて飯を喰う

題詠「神」

神なんてそう言いながら詣でます

無神論それもひとつの宗教よ

感謝です捨てず拾ってくれた君

多年草 一四九号

マスク下げ深く息をし春を待つ

モリカケは命ひき替え暮を引く

けの素晴らしい財産がたくさん残されていることを実感した。その話はまた次の機会に譲ることとする。犬も歩けば棒に当たる的ではあるが、人はさまざまな縁の中に生きている。ある年齢を超えるとそんな風な出会いがあちこちにあることに感動する。まさに「老いの執念」の結実かもしれない。

たかが川柳 されど川柳 (二〇二二年)

このテーマで、私の川柳を下手な句想の解説をつけて連載してきたが、まるでダジャレの気の利かぬ説明のようであらう。作品だけをそのままお見せすることにする。

一月

令和柳多留第三集二四号

生きていくあなたと共にオミクロン

題詠「黄」

人生の交差点にて点滅す

浅黄色母の想い出包む色

題詠「データ」

集めても一夜明ければゴミの山

データとかエビデンスとかうっせえわ

芋羊羹ソールフードとあなたいう

題詠「謝る」

頭下げ陳謝口にし舌を出す

ちがうでしょう優しい言葉こんなとき

ごめんねはこころを開くパスワード

二月

ぱらばらⅡ 一九号

春めくも浮気の虫は蠢かず

チョコなんて身体に悪いとうそぶく日

二月ですネギ大根の甘さ増す

題詠「震える」

不動産やつと実印押ししました

雪空にスカイツリーが震えている

立たされた廊下は自由でも寒い

多年草 一五〇号

次から次と波が来る でも生きる

春の使者恥ずかしそうにサクラ草

雪を見てため息をつく歳となる

題詠「長い」

だんだんと巻かれる長さ短かめに

埋み火の老いらくの恋まだ消えず  
春風もやさしく長い髪が好き

三月

ばらぼらⅡ 二〇号

明日への希望をザルですくつてる  
健康の強い味方よ鈍感さ  
判断は総合的に都合よく

題詠「整理」

よき昭和残す店ほど曇みませ  
身辺を整理し過ぎて友も消え  
断捨離をかくぐつたは猫とペン

多年草 一五二号

ウクライナ裏番組でバラエティー  
春分の陽を追いかけて蝶が舞う  
今日もまた過去形だけで生きてます

題詠「勇氣」

席談る微妙な歳になりました  
ジャンプ台鳥になりきり空を飛ぶ  
プーチンの弾劾デモに参加する

四月

ばらぼらⅡ 二二号

ウクライナ観客席にいる私  
戦場に向かうパパへの子の涙  
同胞を撃つ指先が震えぬか

題詠「土」

TV越し狂気が焼土支配する  
土を食いミミズ畑に感謝され  
汗と土その匂いこそ命です

多年草 一五二号

今そこに第三次世界大戦  
物価高自衛のためにダイエツト  
店員にいちいち習うセルフレジ

題詠「炎」

母と子が砲火に怯え逃げまどう  
火葬なら恋の炎で焼いてくれ  
プロパガンダ炎上すれば平和くる

五月

ばらぼらⅡ 二二号

わが父母の逝った日言える妻がいて

食べません嘘とフェイクのミルクイユ

ジェノサイド地上の悪夢今そこに

題詠「喫茶店」

味よりも机の脇のコンセント  
無粋ですアクリル板のある暮らし  
このご時世砂糖もミルクも要りません

多年草 一五三号

侵略を解放という鬼コトバ  
失敗の一撃君を丸くする  
バアちゃんはテレビ見ながら生き仏

題詠「探す・捜す」

地球上どこにあります良心は  
亡き母の淡き面影残す君  
わが神は虹の彼方に舞い降る

六月

ばらぼらⅡ 二三号

戦争に悲しみあれど勝者なし  
神隠し望みを断つはDNA  
ハマナスは二度と咲かない知床に  
題詠「節」字結び

七月

ばらぼらⅡ 二四号

雷が太鼓たたいて梅雨明ける  
親の歳超えた自分に安堵する  
墓だけはシェルター仕様になつてます

題詠「波」

やり過ぎてネットサーフィンほころびる  
発信源 波紋の行方見守りつ  
遊べない大波小波少子化で

親の歳超えた自分に安堵する  
墓だけはシェルター仕様になつてます

多年草 一五五号

少子化の波をかぶって国沈む  
怖いから平和にしてと小学生  
男たち座ってしると躰けられ

題詠「洒落」

七十は七十なりのオシヤレあり  
ダメダメよ犬馬洒落にダをつけちゃ  
粹と洒落 江戸っ子なれば最期まで

八月

ばらばらⅡ 二五号

銃弾がグレーの歴史美しく  
夏の雲もくもくもくと怒り溜め  
核禁止被爆者言わず誰が言う

題詠「勝負」

一生に一度の勝負せぬままに  
戦争もルールがあると信じたい  
勝ち負けの本当の味を後で知る

多年草 一五六号

オータニサン投げ打ち走り殿堂へ

いつまでも消すに消せないメールあり

変換をよく間違えるひとが好き

早すぎる送るメールにハイとムリ

一〇月

ばらばらⅡ 二七号

国葬の有り様教えエリザベス

旅に出て空の広さを知りました

太陽の切なさをみる夕焼けに

題詠「ストレス」

欲が減るストレスが減る命減る  
やめてくれ子ども扱いわしゃ八十  
親からは期待しないと期待され

多年草 一五八号

ザ・国葬 教えられたね女王に

柿食ってコロナ退治とバアバいう

原発を人質にして賭けをする

題詠「影」

妻のあと影の如くにつきまとう  
あの嘘がバレなきやいいがレントゲン  
影法師あなたの側にいたいただけ

国葬も無縁仏もみな同じ

この暑さマスク着用何の咎

題詠「そっくり」

デジャブですなんでも利用選挙なら  
努力するDNAだけ受け継がず  
この季節帰省の顔で旅をする

九月

ばらばらⅡ 二六号

敬者を祝うホームのひとり飯  
冷や水をあえてかぶって生きていく  
裏路地の陰を伝って徘徊す

題詠「しめしめ」

兎も角も賀状の当たり切手だけ  
引き出しの奥の禁断菓子袋  
こりやなんだ！渡しそこねたお年玉

多年草 一五七号

鳴き尽くしひっくり返って空睨む

暴かれる汚リンピククの裏舞台

不漁です秋刀魚一匹二人して

題詠「LINE」

ばらばらⅡ 二八号

十一月

ばらばらⅡ 二八号

目をつむり深いため息つく地球

自分史に破り捨てたいページあり

年金は値上げの波にのみこまれ

題詠「浴びる」

陽を浴びる亀みて来世決めました

狂気には浴びる非難は注ぐ油か

円安の高波浴びて沈む舟

多年草 一五九号

木枯らしに最後のひと葉しがみつく  
ハロウィーン踏み潰された明日の夢  
経済を回せ回せの目くらまし

題詠「空気」

空気裂くミサイルの音に子は怯え  
招集を逃れ自由の空気吸う  
心地よし空気みたいな君のそば

ばらばらⅡ 句会

題詠「予想外」

また来年会おうとあなた言ったのに  
背後からそっと優しく抱きしめる

一二月

ばらぼらⅡ 二一九号

悠久の下天の夢か天体ショー

十二月また十二枚めくろうか

アレルギー 昭和原人強いによ

題詠「クリスマス」

お疲れさんサントさんにもプレゼント

親子して知らぬふりしてサント待つ

夢運ぶ年一回の深夜便

多年草 一六〇号

今日もまた悔しさ丸め屑籠に

アルマダを沈め奇跡を二度起こす

星空に無音のジェットストリーム

題詠「旅」

長い旅降りる支度をしなければ

窓を開け駅弁買ったあの時代

せかすひとれない小さな旅が好き

(了)